夢を追う人

──セネガルのグラフィティから沖縄の焼物へ──

前　田　夢　子*

公共空間に落書きする行為や落書きそのものを総称してグラフィティと呼ぶ．グラフィティは，日本はもちろん，多くの国で観察できる現象である．グラフィティの中には「マスターピース」と呼ばれる装飾性や芸術性の高いものもあれば，装飾を施さず，マーカーやスプレーなどで文字やサインを描く「タグ」など多様なスタイルがある．私の調査地であるセネガル共和国（以下セネガル）でも同様に，芸術性の高いものから，宗教的イコンを描いたもの，さらには何を書いているのかよくわからない落書きまで，無数のグラフィティが存在する．芸術に造詣の深かったセネガルの初代大統領サンゴールは，国家予算を公共施設の建築装飾に充てるなど，文化芸術の振興を積極的に行なった．現在でもセネガルはグラフィティ活動に法的罰則が科されない珍しい国であり，誰もが白昼堂々とグラフィティを描くことができる．そして，描き手の中には集団を組織している人々がおり，その集団内には緩やかな徒弟制が存在する．

写真 1　COVID-19 感染拡大防止を目的に描かれたグラフィティ
出所：画像引用〈https://www.instagram.com/p/B-OhVTvn6wf/〉

セネガルから沖縄へ

セネガルにおいてグラフィティの「描き手」と地域住民ら「読み手」との相互作用の動態を研究するため，私は ASAFAS に入学をした．しかし，入学直後から新型コロナウイルス感染拡大による各国の渡航制限を受け，セネガルへの入国ができなくなってしまった．そこで，私は調査地を沖縄県に変更し，「やちむん」と呼ばれる焼物の職人見習いの調査をすることにした．

セネガルのグラフィティと，沖縄の焼物職人は一見何の共通性もないように感じられるかもしれない．しかし，上述のようにセネガルでは壁に絵を描く集団が存在し，そこには緩やかな徒弟制が敷かれている．沖縄の焼物

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 2　工房 A で販売されている焼物

も，国内の窯業地では今では珍しくなった徒弟制を用いて技術習得を継続させている．見習いとして当該集団に新規参入する人々はどのような思いで弟子入りし，日々どのような暮らしをし，どのような夢を追っているのか．その実態を調査するために，私は沖縄へと向かった．

沖縄での調査

私が調査地として選んだ場所は，沖縄本島中部西海岸に位置する読谷村という村である．沖縄県那覇市には，「壺屋」と呼ばれる 17 世紀以降現在まで続く焼物の生産地が存在する．壺屋は琉球王朝時代から，琉球王国や庶民の食生活を支え，過酷な沖縄戦直後にはいち早く窯業を再開した．しかし戦後しばらくすると，那覇市の住宅地過密化や，焼成時に登り窯から排出される煙が公害問題として取り上げられたことにより，壺屋で長らく焼物を作っていた人々は 1970 年代以降，読谷村やそのほかの地に窯を移設していった．私の主な調査地となった読谷村には現在，村内に 64 の工房が存在する新たな焼物生産地となっている［読谷村 2019: 15］．

私は上述のような背景を有する同村内の工房 A で，2021 年 2 月 1 日から 2 月 28 日，および 8 月 2 日から 8 月 12 日の合計 38 日間見習いとして働きながら調査を行なった．工房 A は親方，工房長，職人 2 名，そして 4 名の見習いに，14 名のパートの計 22 名からなっていた．[1] 今まで陶芸に携わってこなかった私にとって，見習い生活は新たな学びの連続であった．

見習い生活

工房 A の見習いの就業時間は，月曜日から土曜日の 8 時 30 分から 18 時までである．そして終業後，見習いは各自の技術力を磨くために工房に残り，練習を重ねていく．見習いをはじめてすぐは土の扱い方や，土がどのように飛び散るのかが全く予想できず，私は毎日頭の先から足のつま先まで泥だらけになっていた．

見習いは最初，雑用とも捉えられるような作業をひたすら行なう．たとえば，工房 A では，土練機と呼ばれる機械で粘土を作っていた．ところてんのように土練機の口から出て来た粘土を，当工房では男性の手のひら 2 枚分ほどの長さで切っていく．これは 1 本約 15 キロあり，それを地面に積んでいく．職人が壺を作る際，見習いは「玉づくり」と呼ばれる作業を頼まれる．これは，作る壺の大きさに合わせて，必要な土を「しっぴき」と呼ばれるワイヤーやテグスで作られた道具

1）2021 年 2 月の調査時の人数．2 回目の調査時には工房構成員に若干の変化があった．

写真 3　ンチャクナサー（土を足で踏み陶土を作る作業）をする筆者

で切り分け，粘土の角を潰していく作業である．この作業を行なうには，地面に積まれた約 15 キロの粘土を作業台へ持ち上げる必要がある．こういった，工房長や職人からの頼まれ仕事に付随する些細な作業が，案外筋力を要するのである．しかし同時に，見習いにとってこのような作業こそが土の扱い方，自身の体の動かし方を学ぶ機会となる．柔らかくはないが力を籠めすぎると変形してしまう土塊をどのようにして持つのか，また，その際どこに力を入れれば腰やひざを痛めることなく運ぶことができるのか．そういった知識や技術を日々の作業で体得していく．見習いをはじめたばかりの頃は毎日体のどこかが筋肉痛だったが，慣れてくると力の抜き方もわかるようになった．また，先輩たちの体の動きを参考にしたり，直接聞いたりすることで，徐々に作業をこなすことができるようになっていった．

見習いの語り

このように，短いながらも職人さんや見習いの方々とともに働く中で，あるいはインタビュー調査の中で，彼ら彼女らは私にそれぞれのライフヒストリーを話してくれた．工房 A の 4 名の見習いの出身地は，埼玉県，神奈川県，兵庫県，沖縄県，年齢も 20 代から 40 代までバラバラであった．また，見習いになるまでの前職も多様で，沖縄の焼物との出会いや目指す夢も多様であった．たとえば，工房 A で働く見習い A さんは，カンボジアを旅行中，現地ではすでに伝統が途絶えてしまった焼物を再興しようと奮闘している日本人陶芸家に出会った体験をきっかけに，焼物に興味を抱いたと語ってくれた．

また，工房 B で働く B さんは，陶芸の道に進んだ経緯を以下のように話してくれた．

「工房の器に出会って．やりたいなあと思って．今までそんな器を集めたりとか，そこまで意識なかったですけど（中略）いいなーと思って. すごく沖縄の風土に合うなと思って.」

あるいは，工房 D の見習い P さんに見習いを続けるモチベーションを尋ねた際，P さんは以下のように語ってくれた．

「今絶対やろうと思ってるのは，薪窯で，ちょっと燃やしきれなかった遺品を使い燃料にして，自分の父親の仏具を作る（という目標）.」

これらの語りからは，見習い個々人が個別具体的な背景や動機をもって沖縄で陶芸に携

わっていることがわかる．そして，そのように多様な人々が，焼物を焼き上げるというひとつの目標に向かって日々切磋琢磨をしている．彼ら彼女らの焼物に対する真摯な態度に触れるたび，私自身，焼物ひとつひとつに愛着が増していった．

一方で，現実は時にどうしようもなく私たちを傷つける．工房 A の工房長は，焼物業界の厳しさをこのように語ってくれた．

「この世界は技術があっても，それで独立をしたとしても，5 年 10 年続けられるかっていうのは相当厳しい世界．」

工房長は，彼の先輩や後輩，友人の多くが独立までいかなかったことや，独立ができても体調を崩して地元に帰ってしまったことを話しながら，焼物業界で生き抜くことの難しさを私に説明してくれた．

また，別の工房 B の親方も，「辞めていく人もたくさんいるのか」という私の問いに対し，以下のように語ってくれた．

「不思議なもんでね（中略）本当に才能はあるんだけど，家庭環境とか，彼らを取り巻く環境がね，独立をさせてくれないというのもあるし…体は弱いとかね．」

このように，本人の情熱や才能だけではどうにもならない要因により，見習いの継続やその後の独立が困難になることがよくあるのである．焼物業界で生き延びるには，健康や運に恵まれることも重要なのだろう．

おわりに

調査をとおして，私は自身と同じように夢を抱く同年代の方々と知り合うことができた．彼ら彼女らは胸いっぱいに夢を抱き，尽きることのない不安を打ち消すように毎日ろくろや土に向かっていた．その姿は，日々デスクに向かい研究を続ける私たち大学院生と共通する部分があるように感じられた．セネガルでグラフィティを描く彼ら彼女らも同じように，不安や葛藤を抱えながらスプレーや筆を手に壁と向き合っているのだろうか．それとも，天の采配に身を任せ，軽やかにその身体を動かしているのだろうか．

2022 年 6 月から，私は 3 年ぶりにセネガルへ調査に行く．不確定な未来に不安と期待を覚えながら，夢を追う人を追うために．

引　用　文　献

Rabine, L. 2014. These Walls Belong to Everybody: The Graffiti Art Movement in Dakar, *African Studies Quarterly* 4(3): 89–112.

大山エンリコイサム．2015.『アゲインスト・リテラシーグラフィティ文化論』LIXIL 出版.

読谷村．2019.『令和元年度読谷村村勢要覧』沖縄県読谷村村役場.